

第 10 章 上藻別駅通

植田史彰

はじめに

本章では、北海道紋別市に位置する上藻別駅通について取り上げる。「駅通」というものは現在使用されていないが、使用が停止された後から現在まで残っているその意味、現在でこの駅通が果たす意味について考えてゆく。

図 10-1 上藻別駅通の看板



出所：まるごと紋別

10.1 駅通（所）とは

この章では、上藻別駅通所についてとりあげるが、その前に「駅通」や「駅通所」といったものがどういうものなのかを見てみたい。

図 10-2 上藻別駅通の本館と増築部



出所：しゃかりきに

10.1.1 駅通の定義

駅通という言葉は、大辞泉第二版（2012）によると、「①宿場から宿場へ荷物を送り届けること。宿（しゅく）。馬つぎ。②郵便。」と大まかに 2 つの意味を述べられており、他の辞書でも大方同じように記述されている。これはその通り、宿場から宿場へと荷物を送り続けること、またはその派生である郵便のことであり、さらに駅通所はこの機能を果たしていた施設を指す単語である（「所」と付けなくても駅通所のことを指す場合もある）。言葉としての定義はシンプルにこれだけである。

10.1.2 駅通所の成り立ち

定義としてはそれで良いが、上記の駅通というものに至るまではどういった成り立ちであったのだろうか。

開拓期の北海道では、宿泊と運送の便をはかるため、江戸幕府から「駅通」と呼ばれるものが 126 ヶ所引き継がれ、駅舎と人馬を備えて、土地区割りや道路作りの技師ら、公用

の旅人専用の宿泊施設として利用されていた。駅通は明治以降の北海道独特の制度による建物である。最初は「本陣」と呼ばれ、続いて旅籠屋並、旅籠屋と改称され、最終的に「駅通」におさまった。道が次第に整備され、より多くの入植者がやって来るようになると、彼らのための宿泊施設や荷物の運び役が必要となった。明治政府はこのため、有力者に駅通を設置するよう求めるとともに、国費で統一規格の建物と運送用の馬などを用意するようになった。道内では延べ 676 ヶ所で駅通が開業されたが、全部または一部が現存するのは 16 ヶ所のみである。

駅通の開設は、北海道の開拓とともに最盛期を迎えるが、道内で開拓が進んでくると、今度は鉄道開通が各地で見られるようになり、次第に駅通所はその役割を失い、閉鎖されていった。そして最終的に 1948 年に駅通制度は廃止されることとなる。

このように、駅通は北海道の開拓の歴史に寄り添った存在であった。

図 10-3 駅通所内の様子と小玉勝信さん



出所：朝日新聞（2017.4.30）

10.2 上藻別駅通所の概要

ここまで駅通について説明してきたが、その中でも本章のテーマである上藻別駅通所は、いったいどういった利用がされてきたのだろうか。具体的に明治期に駅通所として使われていたときの利用と、駅通が廃止されてからの利用のされ方を分けてみてゆこう。

10.2.1 駅通所としてのすがた

上藻別駅通所は 1926（大正 15）年に官設の駅通所として建てられ、1934（昭和 9）年に増築された。高地昇氏が駅通取扱人として営業した。上記の通り駅通の例外になく人馬継立と旅人宿泊など運輸・通信・宿泊を一体としたものとして利用・運営された。入母屋造鉄板平葺建屋の本館と、寄棟造鉄板葺 2 階建の増築部からなり、外壁は下見板張で、2 階窓には装飾的な額縁をつけ、内部は中廊下式で客室等を配しており、延べ面積は 301.4 m² である。1926 年に建設された上藻別駅通所は、旧鴻之舞金山（後述）と紋別市街の中継点として、1940（昭和 15）年まで活用された。

10.2.2 旧駅通所（観光施設）としての利用

駅通業務を廃止した後、この施設は高地旅館として 1949（昭和 24）年まで営業した後住宅として使われた。その後さらに建物の老朽化が進み、その歴史を閉じようとしていた

ところ、2004（平成 16）年に元鉱山関係者 5 人の有志が立ち上がり、「上藻別駅通保存会」を結成した。往時の賑わいを今に伝えるただ一つの建造物であるこの消えかけた遺産を守ろうと、旧鴻之舞金山の歴史を後世に語り継ぐ資料館として、「駅通所を当時の姿に必ず蘇らせる」という会の熱い思いが地域住民の共感を呼び、活動初期から地域ぐるみの手づくりで、少しずつ修復が行われた。展示物の多くは住民からの寄贈によるもので、2005（平成 17）年に歴史博物館として開館した。現在も、昔懐かしい生活用品から畑作の道具まで、貴重な資料が展示されている。その後も、地域が一丸となって駅通所周辺施設の修復活動を続けるとともに、歴史の伝承活動を続け、今では、地域住民と他地域の交流、高齢者と若年者の交流など、開拓時代に駅通所が持っていた交流の場としての役割が現代に蘇っている。紋別地方ではこの『旧上藻別駅通』が唯一現存する駅通建造物であり、また 2008（平成 20）年には、国の登録有形文化財（建造物）に指定された他、韓国映画のロケ地にも採用されるなど、その知名度も上がっており、多くの観光客に注目されるまでに至っている。

図 10-4 各地点の位置



出所：朝日新聞 （2017.4.30）

10.3 鴻之舞金山と旧上藻別駅通所

この上藻別駅通所は、かつて「東洋一の金山」と謳われた鴻之舞鉱山と深い関係がある。紋別市街地から南に約 30km 離れた山あいの紋別市鴻之舞にある「鴻之舞鉱山」だが、これはかつて金山であった。金鉱脈が発見されたのは 1916（大正 5）年である。翌 17 年から住友による本格的な開発が始まった。外国から資材を調達するために金は不可欠だとして、増産に次ぐ増産が図られた。その後この鉱山は鉱区設定を巡る紛争が起こったり、太平洋戦争開始により休山したり、戦後慢性的に産出量も減少してゆき、閉山に至った。

「宇宙戦艦ヤマト」のテーマソングなどで知られる作曲家の故・宮川^{ひろし}泰さんも、小学生時代をこの鉱山の周辺に栄えた町で過ごした。1966（昭和 41）年に発表された日本の楽曲「銀色の道」という曲は、土木技術者の父親が建設に携わった専用軌道「鴻紋軌道」（鴻之舞元山・紋別間）のレール跡の水たまりに月の光が映る姿を見て、「これこそ銀色の道だ」と確信し、作曲したという。また同時に、「この歌詞を彼（作詞家・塚田茂氏）

から渡されたとき、どことなく懐かしさを覚え
ました。"遠い遠い遙かな道は冬の嵐が吹
いているが谷間の春は花が咲いている"。
少年期を過ごした鴻之舞に重なる内容です。
正直なところ、曲をつける時点では、それほ
ど意識はしていなかったと思います。でも父
が亡くなり、その後、何度か紋別を訪れて、
父の無念の思いや自分の望郷の念が重なりあ
って自分自身、この曲の原点が鴻之舞にある
と確信するようになったのです」と『文芸オ
ホーツク 11 号』（2001）で言及している。ちなみに今年は鴻之舞鉱山の開坑からちょうど
100 年である。

この鴻之舞金山と、紋別市街地の位置関係を地図で眺めてみると、ちょうどその途中に
上藻別駅通所があることが分かる。上藻別駅通所は、この二地点の中継地点として、鉄道
のない地域へ向かう人たちに宿と馬を提供していたのである。

10.4 展示品

上藻別駅通所にはさまざまな展示物があつたが、その中でもここでは 6 点だけ紹介す
る。なお、図の上の丸囲みの番号はその下の文章の番号に対応する。

図 10-6 ①手回し計算機



図 10-7 ②坑内自転車



図 10-8 ③炭化アイロン



撮影：片原 顕光

① 手回し計算機

Blue Star の手回し計算機は、機械式計算機とも呼ばれこの形は特にタイガー計算機と
いう種類である。歯車などの機械要素の組み合わせにより、演算を行う。かつて駅通所で
使っていたものであろうか。

② 坑内自転車

炭坑内使っていた自転車で、車輪が4つ付いている。坑内軌道を走っていた模様である。かなりシンプルな仕組みで作られている。

③ 炭化アイロン

名前どおり、炭化しているアイロンである。大きな持ち手と潜望鏡のような空気筒が特徴的である。こちらもかつての駅通所で使われていたものであろうか。

図 10-9 ④レコード

図 10-10 ⑤削岩機

図 10-11 ⑥金鉱



撮影：片原 顕光

④ 鴻之舞鉱山歌のレコード

この駅通所の中でもひととき目立って存在感を放っていたレコードである。炭鉱が活発に使われていた頃の活気のある歌がそのまま刻まれている。案内して下さった方もこのレコードと共に歌って下さった。

⑤ 削岩機

鴻之舞鉱山で使われていたとされる削岩機である。右側の先端部分で石を削っていたとされる。最もわかりやすく鉱山を思わせる一品である。

⑥ 金鉱

金を多量に含んだ鉱石である。密度が非常に高く、実際に持ってみるとかなりの重さがあった。鴻之舞鉱山の金の豊富だったことを思わせるものである。

10.5 紋別と藻別という名称

ここで少し余談であるが、紋別市には藻別という地域や今回の上藻別という地域がある。この“紋別”と“藻別”が大変似ているとは思わないだろうか。これは実際偶然ではない。

まず紋別という地名の語源は、アイヌ語の「モペツ」（静かな川の意味）からきている。紋別市の中心地の地名が、川がないのに静かな川と呼ばれるのは不思議に思われるが、もともとは元紋別を流れている「藻^{もべつ}川」を指したもので、モペツコタンに住んでいたアイヌの人たちが付けた地名である。現在の紋別市街の方に番屋ができて、モペツコタンに住んでいたアイヌの人たちが移り住むようになり町並みができると、いつの間にか地名も移動し「モペツ」が使われるようになった。

これが“紋別”の由来であるが、いかにもこれと全く同じ由来で撥音が脱落し（本来は紋別の方に撥音が挿入されたのであり、藻別の方がアイヌ語の発音から近いが、ここでは紋別の方が有名であるためこう書いた）、異なった漢字表記を当てたのが“藻別”である。同じ語源でも川の流域範囲などの自然的理由や町の発展などの社会的理由による重複から発生した地名なのである。

10.6 他の駅通

道内には今回の上藻別駅通所の他にも 16 ヶ所の駅通が現存（改築や一部残存を含む）しているのでここではそのうち 3 ヶ所の駅通所と 1 ヶ所の駅通の跡地を次の表にて紹介する。

表 10-1 北海道に現存する 3 つの旧駅通所と 1 つの跡地

旧島松駅通所	北海道北広島市島松地区にある。国の史跡に指定された。ウィリアム・スミス・クラークが、帰国の際に「青年よ、大志を抱け (Boys, be ambitious.)」という言葉を残した場所としても知られる。
旧奥行臼駅通所	北海道野付郡別海町奥行にあり、別海・別当賀・西別への分岐点となる駅通である。
旧忠別太駅通所	北海道旭川市神居にある。三大河川の石狩川、忠別川、美瑛川の合流地点で、上川農作試験所の官舎だった。
第 2 号駅通跡	北海道（旧）常呂郡端野町緋牛内にあった。この駅通が端野 2 号駅通と呼ばれており、端野町の名の起源へととなった。後に交通量が急増したため移転し、緋牛内駅通所と改称した。

筆者作成

上記 3 つの駅通の以外に、旧温根別北線駅通所（士別市）、旧仁多志別駅通所（沼田町）、旧ソーケシュオマベツ駅通所（札幌市）、旧幌向駅通所（幌向町）、旧武利^{ムリイ}駅通所（遠軽町）、旧武華駅通所（北見市）、旧斜里^{サリ}駅通所（斜里町）、旧武佐駅通所（中標津町）、旧塘路駅通所（標茶町）、旧黒岩家住宅（札幌市）、旧官設共徳（久保内）駅通所（壮瞥町）、旧栄浜駅通所（島牧村）、旧川汲山道駅通所（函館市）などの 13 の駅通があるが、この中には非公開のものも多い。

参照 HP

・朝日新聞 2017 年 4 月 30 日 「鴻之舞鉦山跡（紋別市）」

<http://www.asahi.com/area/hokkaido/articles/MTW20170501011580001.html>

・オホーツク観光連盟公式 HP

<http://www.okhotsk.org/>

・株式会社 紋別観光振興公社観光事業課 HP

<http://mombetsu.net/>

- ・旧島松駅通所（国指定史跡）HP

<http://www.educ.city.kitahiroshima.hokkaido.jp/ecomu/kyouzai/ekitei/sub3.html>

- ・国登録有形文化財旧上藻別駅通所

http://www.mlit.go.jp/sogoseisaku/region/teдукuri/pdf/Part24_H21/H21_ippan_02.pdf

- ・紋別市 HP

<http://mombetsu.jp/index.html>